

文芸

俳句

大方は自家菜園の七日粥

伊藤 敬子

母の喰む雑煮の餅を小さく切り

今関満喜子

蠟梅の香りを訪ぬ友訪ぬ

魚地 照子

水仙のほのかな香り春を待つ

鹿子木小夜子

待つとなく待つ鶯の二声目

川島 通則

大旦那成田飛び立つ機影かな

向後 寛

米一粒きざむ日脚に春来たる

越川せつ子

どんど焼牙むく獣昇りけり

小松 藤男

神棚の捧げ餅かじる嫁が君

佐瀬 輝夫

やはらかし立春の灯を点すころ

椎名万里子

去年今年一步一步の一万歩

市東富美江

晩年を助け合ひつつ春立ちぬ

鈴木とし子

木の間風我が身に敵し浅き春

土屋美枝子

立春の里の竹林日を残す

土屋 義昭

初鶏やたくまじき声響き来る

戸村 静華

春立つや自家菜園の予定表

内藤 くに

初暦巻き癖残し吊られけり

早川 勇

そこの寺社あれば詣でて松の内

藤田 雅夫

短歌

庭に干す唐辛子の色見し友は

紅を褒めるも俺は要らぬと

押尾 輝子

おめでどうの声ひびく中晴れやかに

成人式の着付をしゆく

椎名美枝子

北風荒れし川の岸辺に鴨幾羽

寄り添ふままに動くともせず

芹川 初子

検査する前より不安は膨らみて

膨らみしままカメラに向かふ

鈴木まさ子

痛む足引き摺りながら唐突に

童話「人魚姫」の足を思ひぬ

田崎 尚美

訪れしとげぬき地蔵の御前に

吾はひたすら耳を洗いぬ

加瀬 弘子

菩提寺の桜の若木に寒肥を

ほどこせし夫遠き眼をする

水須 俊

掘りあげし竹の根もとの節ぶしに

命萌せる白き芽のあり

青木 秀子

雲ひとつなく澄み徹る冬の空

訪ひ来し女孫と仰ぎあるなり

斉藤つね子

こうほう博物館 96

昔の硯

三月二十日まで、図書館の町民ギャラリーでは現代水墨画展が開催されている。水墨画は、その名のごとく墨で描かれた絵画で、中国唐代に創始され、日本には鎌倉時代に禅宗と共に伝わったとされる。墨画を描くにしても、書を書くにしても大事なものが、その道具となる文房四宝である。文房四宝とは紙、筆、墨、硯として硯である。このうち、遺跡からは残念ながら無機物である硯しか出てこない。今紹介する硯は、篠本城跡から出土した今から五百年ぐらい前のものである。みな破損しているが、黒い石の粘板岩製で、扁平な長方形に海と丘があり、現代のものどほどんど変わらない。違うところは、丘の部分が大きくくえぐれていることぐらいである。



▲篠本城跡出土の硯

これはかなり使い込まれた証であり、当時の人々は硯を大事に使ったことを示す。また、裏面に線刻で文字が書かれたものや、羊羹状に切られ、硯石に再利用されたものもある。当時の人々がこの硯を使って、何を思い、何を書いたのだろうか。(社会文化課 道澤 明)

作品展

◎町民会館ミニギャラリー

3月 光書道会

◎文化会館ロビー展

3月 横芝写真クラブ

◎サビア展

3月 水墨画クラブ

◎銚子商工信用組合展

3月 展示なし

